

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境— 「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



100年以上昔の明治期に作られた灌漑用水路。曲がりくねることによって瀬と淵が生まれ、環境省指定のオグラコウホネ、アオカワモヅク、チャイカワモヅクなどの希少種が今も生育している。(京都府南丹市)(撮影:光田重幸)

「揺るぎない環境知」へのマイル・ストーン

光田重幸(同志社大学理工学部)

「揺るぎない環境知」へのマイル・ストーン

光田重幸（同志社大学理工学部）

佐藤プロジェクトの連続公開講座「農業が環境を破壊するとき」を共催の形でお世話させていただいて、ほんとうに良かったと思っている。無精で腰の重い私にとって、「共催の責任者」という肩書きは、他のことはさておいても毎回の出席を義務付けられたようなものだったから。実際には校務のため二回ほど欠席してしまったので偉そうなことはいえないのだが、この講座の全体を通して見えてきたのは、農業という人類史上初めての大規模な「自然破壊作業」を伴う行為について、過去から現在にいたるヒトの環境知が、正確な科学的方法によって浮かび上がってきたことだろう。

それはときには、植生的に単調で生物多様性の点では不毛にちかい竹林を、むしろ焼畑適地として利用する農法であったり、野生のツルマメに実った大豆とのF1（一代雑種）から、「丹波黒大豆」を育成した先人の知恵であったりした。つい戦前までは、日本の水田でも魚類の養殖場として機能していたことが知られているが、本来水田とはそのような多くの生物の生息地であり、ヒトはたくみにその一部をタンパク源として利用してきたのである。これら三つの事例に共通するのは、「よく自然を観察し、無理をせず、われわれヒトにとって有用なものを、知恵を使って頂く」という姿勢だといえるかもしれない。イネ以外の生物の共存を許さないかのような現代の水田農耕がいかに異常か、これだけでも推して知るべしだろう。



田畑への採光を良くし、肥料にもするために山裾を五間（ごけん）ほど刈る「翳切り（かげきり）」。
イノシシの侵入を防止し、手前の萱原とともに希少な原野性生物が多く残っている。（京都府南丹市）

3月14日に行われた「農業と環境」は、これまでの講座を振り返っての「まとめ」の意味があった。冒頭に佐藤洋一郎氏が「コシヒカリ神話」を切り出し、「コシヒカリは精米の歩留まりが良いので、米屋が儲かる。コシヒカリが特別に旨いというのは、そのために広められたことである」と話された。特定の食物を摂れば痩せたり病気が治るという風説を「フード・ファディズム」というが、これなど「ブランド・ファディズム」といえるかもしれない。基本的には個人が冷静に味覚を判断する能力が、流布する言説によって麻痺させられているということであり、政治的なファシズムとも一脈通じるところがある。現代という時代の恐ろしさが垣間見えた一瞬でもあった。

考えてみれば、「共存」や「もったいない」「無駄にしない」ということは、伝統的な教えのなかにすでにあることである。道元禅師は、「雑巾がけに使った水はやわらかくなっているから、木の根かたに捨てよ」と弟子に命じた。米のとき汁はいうまでもない。この連続公開講座は、科学的手法を用いながら、個人が判断することの重要性と、「揺るぎない環境知」を参加者に伝えたことにおいて、今後の環境世界への一里塚を打ち立てたといえるだろう。